

## は し が き

原爆被災後 45 年目を迎える今日、原爆被災学術資料センターの使命を新に認識し、今後の方向を考えることは極めて重要なことである。地球規模において環境変化の問題が論議されつつある今日、放射線被曝によって人類が蒙る影響は、たとえ核戦争勃発の危機は薄らいだとしても、核実験、原発事故を始めとし、産業その他に多用される放射線による環境汚染の問題として大きな論議の対象となるものである。

人類の経験した大集団の大小さまざまな放射線全身被曝例として、広島、長崎の資料は今後ともに貴重なものであることに変わりはない。このような理由から原爆被曝に関するできるだけ多くの資料を集め、残し、これを整理し、これらの資料を社会に役立てるように還元することは原爆資料センターの大きな使命である。しかし、限られた費用と限られた人員での、この大きな目的の達成は必ずしも容易でなく、又、今日、被爆者から得られる医学的資料から被曝の影響を抽出してゆくことはかなりの難しさを伴うようになってきている。

長崎大学医学部原爆被災学術資料センターは以上の現況のなかから、多くの未解決の被曝の影響解明を目標とした業務に努力を重ねてきた。これらの年々の歩みを記録に止めるのがこの報告書であり、さらにいま何が重要なのか、原爆資料センターとしていま何が可能なのか、模索しつつ前進すべきと考えるものである。

資料調査部主任 市丸道人